

SHINCHO CREST BOOKS



Illustration by Soshiki Daisuke

遠い国の物語。

新潮クレスト・ブックス 2017-2018

〔新刊インタビュー〕 トーン・テレヘン

〔近刊紹介〕 ローレン・グロフ

ただいま翻訳中! これから出るクレスト・ブックス

新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2017

SINCE 1998

C	R	E	S	T
B	O	O	K	S

Shinchosha

ハッピーエンドの お話はないの？

昨年刊行の『ハリネズミの願い』がベストセラーとなっている
オランダの作家トーン・テレヘン。この夏に刊行された
『おじいさんに聞いた話』は、自ら「もっとも愛着がある」と語る作品だ。
テレヘンの祖父はサンクトペテルブルクに生まれ、ロシア革命の翌年、
オランダに亡命。終生、望郷の念に捕われて生きた人だった――。

トーン・テレヘン *interview with Toon Tellegen*

通訳・翻訳 Saki Nagayama / 取材・構成 Rieko Sugai (Shinchosha)

Special thanks to Dutch Foundation for Literature

自宅の仕事場で。右上の「衝突」の絵
は、現在アーティストとして活躍する息子
のボリスが3〜4歳のときに描いたもの。

トーン・テレヘンの掌篇小说集『おじいさん
に聞いた話』のおもな舞台は、〈おじいさん〉
が生まれ育ったロシアのサンクトペテル
ブルク。孫である〈ぼく〉にロシアのことば
かり語りつづけるおじいさんの姿には、作家
自身の祖父が色濃く投影されています。

サンクトペテルブルクの貿易商

——サンクトペテルブルクという地名を初めて耳
にしたのはいつころですか。

覚えていないけれど、五歳くらいでしよ
うか。これまでに三度ほど行きました。初めて
旅したのは一九八五年、四十三歳のときのこ
とです。まだレニングラードと呼ばれていた
ころですね。

——ロシア革命前のサンクトペテルブルクには、
オランダの貿易商がたくさん移住していて、コ
ミュニティができていたそうですね。

十八世紀からすでにオランダ人が住んでい
ました。ぼくの祖父の祖父の父がサンクトペ
テルブルクに開いた店に、ロシアの軍人で、
エカテリーナ二世の愛人だったポチヨムキン
が竹のステッキを買いにきたそうです。一七
八〇年のことです。その店では、オランダ領
東インドから竹を輸入し、アムステルダム経
由でサンクトペテルブルクに運び、販売して



いたんです。竹や香辛料などいろいろなものを扱っていました。

——代々、貿易商だったのですね。

順にさかのぼって話してみましよう。ぼくの母は一九〇九年に、祖父は一八七五年に、曾祖父は一八三五年に、高祖父は一七九八年に、それぞれサンクトペテルブルクで生まれました。高祖父の父、ぼくのひいひいひいおじいさんは一七六〇年ころオランダで生まれ、若いときから商売でサンクトペテルブルクを訪れていた。やがて店を構えるようになります、そこにポチヨムキンがやってきた。一族のなかには、彼より先にサンクトペテルブルクに行っていた者もいた。彼の父もそうだったかもしれない。

彼らはオランダから馬車でサンクトペテルブルクに向かったんですよ。ほかに交通手段がなかったから。バルト海に沿って、ドイツ、ポーランド、リトアニア、ラトビア、エストニア……何週間もの行程だった。

——四代も五代にもわたってサンクトペテルブルクに暮らしていらしたんですね。

ええ、とても長い歴史があるんです。

おじいさんに語らせる

——巻頭に「バプロフスクとオーストフォールネ



右：1904年、サンクトペテルブルクの写真館にて。左から二人目がテレヘンの祖父、隣が祖母。祖父に抱かれているのは1903年生まれの母の長兄。右端の二人が曾祖父と曾祖母。手前の少年と少女は母のいとこ。犬は家から連れてきた。1909年生まれの子はここには写っていない。上：76、7歳の祖父エフベルト・エンゲベルツ。金婚式の日に撮影。



「行ききの列車」という長い詩が一篇おかれています。祖父と母と〈ぼく〉が列車で旅をしている。向かっているのはオランダのオーストフォールネなのに、祖父は、車掌に行き先を問われると、ロシアのバプロフスクと答える。

バプロフスクに家族のダーチャ（夏の家）があったんです。ぼくはこの本全体を、「ぼくの祖父がぼくに話すことができたかもしれない物語」として書きました。祖父という存在の土台であるロシアでの暮らし、体験、さまざまな知識が出てきます。ディテールに時代的な齟齬がないよう細心の注意を払いました。

——小説内でのリアリズムということですね。

そう、まったくの作り話ではないんです。ストラクチャーはほんのものです。その構造のなかで、祖父が孫の〈ぼく〉に話をする。子どもの〈ぼく〉には、その話が作り話かどうかわからない。でも皇帝がロシアじゅうの犬を集めて戦場に送ったという話（「犬」）、これはほんとうであるはずがない。祖父が孫に空想の話聞かせているんです。ぼくが話をつくるのではなく、祖父に話をつくらせたんです。だからぼくには責任がない（笑）。

——この本はそもそも、お友だちに宛てて書いた手紙だったそうですね。

手紙の前につだけ、「鳩墓地」という物

語を書いていました。オランダの月刊誌に掲載されたのですが、珍しい病気で死んだ人だけが入れる特別な墓地の話(笑)。かなり不条理な話です。それを讀んだ兄が、「ぼくはおじいさんからこんな話を聞いたことがなかったな」と言っただけです。兄がほんとうのことだと思ってくれたことがとても誇らしかった。

それからずいぶんたった一九九七年のこと。夏のバカンスで南フランスに滞在中、友人の作家、ケース・ヘト・ハルトに手紙を書いていて、またおじいさんが話したかもしれないほんとうのような話を書きたくなった。

親愛なるケース様、今日は月曜日、ぼくたちはもうすぐ泳ぎに行くところ。買物もする予定。すばらしいお天気で、きのうは鹿を見た。ぼくの祖父からこんな話を聞いたんだ……というようにお話を書いて、それからまた、いまから森を散歩してくる、と書いて、またお話……そんなふうにならずと書きつづけた。この本一冊分を書き終えたときには、二〇、三〇枚の束ができていました。

オランダにもどるとき、村役場でコピー機を借りてコピーして、元の手紙は友だちに送りました。オリジナルの手紙は彼がまだもっていると思うよ。わからないけど(笑)。

——夢中で書きつづけたのは、おじいさんのこと

を、おじいさんのふりをして書くという発見がとも楽しかったからでしょうね。

まさにそのとおりです。毎日、ページがどんどん増えていって……あれは特別な時間だった。

これはロシアのお話だからね

——おじいさんは、おはあさんにいくら止められても、死をめぐる話や悲惨な話ばかり(ぼく)に語りつづけます。貧乏な下僕がいっそう不幸になつて家族もろとも無残な死を遂げるとか。ハッピーエンドのお話はないの？ と(ぼく)ならず



とも思いますが、おじいさんは、「これはロシアのお話だからね」と言うばかりです。

ロシアの悲惨な話というところ、ゴーゴリの『外套』を思い出します。あの主人公は幽霊になって恨みを晴らしますよね。でもこの本のお話は、外套を取られたと思つたら、そのあと帽子も靴もぜんぶむしり取られてぶつ切り終わる、というような……。

それは、ロシアでの祖父の人生があるとき中絶され、亡命を余儀なくされ、不幸な終わりを遂げたから。それが彼の人生だった。復讐したいと思つても、ソヴィエトに復讐することはできなかった。

——その無念が曇みかけるようにして響いてきます。そしてどんどん読んでいるうちに「これが人生なんだよ」と言われているような気がしてきます。でも、陰鬱な話をこれだけ生き生きと書かれているのは、そこに惹きつけられるものがあるからでは？

それはつまり……陰鬱な人びとをめぐる物語は陽気な人びとの物語よりずっと面白いからですよ。文学のテーマはいつでも争い、悲しみです。人生を楽しんでいる人びとの話はずまらない(笑)。

——そうですね(笑)。もうひとつ、とても印象的なのは「ロシア語には(罪)を示す言葉が十一もある」と始まる「罪」という掌篇。おじいさん



陰鬱な人びとの物語は
陽気な人びとの物語より
ずっと興味深い。
文学のテーマはいつでも
争い、悲しみです。

Toon Tellegen

1941年、医師の父とロシア生まれの母のもと、オランダ南部の島に生まれる。ユトレヒト大学で医学を修め、ケニアで3年間マサイ族の医師を務めたのちアムステルダムで開業医に。1984年、幼い娘のために書いた動物たちの物語『一日もかかずに』を刊行。以後、動物たちを主人公とする本を50作以上発表し、国内外の文学賞を多数受賞。2016年、日本で翻訳出版された『ハリスミの願い』がベストセラーに。本書は、作家自身がかつとも愛着がある作品だと語る自伝的掌編集。

お話とほんとうのこと

産は、株やバブプロフスクの別荘など、すべて共産党に没収されました。共産党政権下のロシアに残っていたら、貿易商だった祖父は収容所送りになっていた可能性が高い。だから、祖父がロシアにもどることはぜったいに不可能だったんです。

——物語はすべて「創作」でも、おじいさんとおばあさん、テレヘンさんと思われる（ぼく）、そしてお母さん。それぞれの人物像はテレヘンさんのなかにある実在の彼らのイメージなんです。同じ経験をなさったおばあさんが、まったく陰鬱ではないのが印象的です。

そう、祖母はいつもエネルギーで前向きでした。息子が五人に娘が一人——この娘がぼくの母です——、祖母は思ったんでしょ、沈み込んでいる暇はない、働かなくちゃ、家をきりもりしなければと。祖母のオランダ語には訛りがありました。彼女はオランダ人でもロシア人でもなかった。たくさんいる姉妹たちは、スイスやドイツなどいろいろな国に住んでいた。祖母はお金がなかったから、一度も旅行には出なかつたけれど、ジュネーブなどから姉妹がライデンに訪ねてくることはあった。ぼくも子どものころ、母のいとこ

が、「正直に言えば、わたしは罪が好きなんだ」と言う。「罪をもたない人間は好きではない。罪なしに栄えるものはない」と。

ぼくは実際には一つも「罪」というロシア語を知りません（笑）。ロシア語は話せないんだ。でも祖父が陰鬱な人間であったことは事実です。生まれ育ったロシアを去らなければ

ばならず、息子二人を戦争で亡くした。よくため息をついていた。長いあいだ、ロシアに帰ることだけを切望していました。
——もし帰っていたとしたら、おじいさんはどうなっていたでしょう。

それはわからない。同じように陰鬱だったかもしれない。祖父がロシアでもっていた財

たちをたずねて、パリやロンドンをよく訪れたものです。

祖母の名字はブレシエー、スイスのフランス語圏の名です。祖母の母はブランケンベルフという名字で、バルト三国の出身でした。ドイツ人ではないけれど母語はドイツ語で、祖父ともドイツ語で話していた。祖母の父は、一八二二年、ナポレオンとともにロシア遠征をし、ナポレオンがフランスに引き揚げたあとも、現在のラトビアの首都、リガに留まったという話を聞いています。

——テレヘンさんのおじいさんは、貿易商でなければ詩人が植物学者になりたかったそうですね。おじいさんが書かれたロシアをめぐるエッセイが出版されていますが、その遺稿を見つけたとき、どんな感想をもたれましたか。

これはすごい、特別なものだと思います。祖父がオランダに逃れてきてから十年程たった一九二九年ごろ、ぼくが生まれるずっと前に書かれたもので、これを読むと、まだしっかり人生を歩んでいるエネルギー豊富な男の姿がうかがえます。ぼくが知っている陰鬱な祖父とは別人のようでした。

祖母が捨てようとしていた原稿を母が救いあげ、そのまましまいで込んでいたものをぼくが見つけました。祖父がそれを書いてから五十年が経っていました。

医師として働いているときだったので、夜の時間を使って祖父の手書きの草稿をタイプで打ちなおし、スペルミスを修正しながら数週間かけて完成させました。その後、長いあいだ眠らせたままだったのですが、あるときシャルル・ティマーという著名な作家・詩人で、ロシア文学の翻訳者でもある人物に見せたい、出版すべきだ、と言ったのです。この祖父の回想録は、ロシア語を学んだ妹といっしょに監修し、『ロシアの記憶』というタイトルで、二〇〇四年にケリド社から出版されました。

——さいごの三つの掌篇「翼」「葬儀」「ステツプ」からは、とりわけ強くおじいさんへの哀惜が感じられました。

「葬儀」の一部は祖父のお葬式で実際に体験したことそのままです。オランダでは、葬儀で涙を流して悲しんでいた人たちが、そのあとみんなでコーヒーを飲みはじめると、とたんに陽気な雰囲気になることがよくあるんです。長く会っていなかった人たちが誰かの死の機会に集まるわけですからね。まだ幼かったぼくは、その陽気さがすごく嫌だった。祖母を見ると、ひとり悲しみに沈んでいました。誰もそんな祖母を気にかけていなかった。ぼくも祖母に話しかけなかった。そのこ

とを、ずっと忘れられずにいました。

ぼくの長兄のベンは祖父のことを、いつもため息ばかりついているつまらない男だと言っていました。ぼくはいつも祖父の肩をもった。「だってあれほど多くの悲惨な体験をしたんだから。ぼくだってそんな体験をしたら、ため息をつくと思う」と言ってる。ベンは聞く耳をもちませんでした(笑)。

——読み終えると、〈ぼく〉とテレヘンさんのおじいさんへの鎮魂の思いが、しみわたるように伝わってきます。

二〇一七年六月十一日、アムステルダム



『おじいさんに聞いた話』
トーン・テレヘン著／
長山さき訳
サントペテルブルク生まれの祖父は、祖母にいくら諫められても、孫である〈ぼく〉に人生の悲惨と理不尽を語りつづけた。
978-4-10-590140-0
定価 (本体 1800 円+税)

ただいま翻訳中!

今秋以降に刊行を予定している注目の作品を、
それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。
名手による初短篇集から、大ベテランの群像劇まで。
多彩な物語にご期待下さい。



photograph by Isadora Mitsunaru

※タイトルはすべて仮題です。

『ノーラ・ウェブスター』

コルム・トビーン
Nora Webster by Colm Tóibín

榎木伸明
text by Tochigi Nobuaki



ノーラ・ウェブスターは夫に先立たれてはじめて、自分には趣味さえなかったことに気づく。専業主婦、四六歳。じゅうぶん幸せな結婚生活だったが、貯金はなく、わずかな年金では子どもたちを養っていけないので、結婚前に勤めていた事務所に再就職する。元来愛想がよいほうではなく、ものごとをよく考えた末に結局黙り込んでしまうタイプなので、なにかと生きづらい。

一九六九年、旧弊が残るアイルランドの田舎町で、ノーラの自分癒しがはじまる。レコード音楽鑑賞同好会に参加してベートーベンに目覚め、美しい声で歌える自分自身にも気づく。日々の暮らしに潜む発見を繰り返すうちに人生の新局面が開かれ、魂が閉塞感から解放されていくのだ。苦しみを抱えながら生き延びようとする女性を描くコルム・トビーン の筆致はいつもながら細やかで力強い。

(二〇一七年十一月刊行予定)

『昏い水が押し寄せてくる』

マーガレット・ドラブル
The Dark Flood Rises by Margaret Drabble

武藤浩史
text by Mutoh Hiroshi



イギリス人は死に臨んでもユーモアを忘れません。有名な『ブルワー何でも事典』には、「奇妙な死因」、「臨終の言葉」といった項目があり、エリザベス一世の寵を得て手柄を立てた冒険家ウォルター・ローリーが後に失脚して斬首される間際に発した言葉——「心の向きが正しいのなら、頭の向きなんかどうだっていい」——などが紹介されています。

去年出版されたマーガレット・ドラブルの最新作は、小さい頃からこの事典が好きだった、せっかちに働きつづける七〇代の女性を中心とする老人群像小説で、かつて出産、誕生、育児を見事に描き出した彼女が、滑稽と深刻をミックスさせて、老いの実感を彩り豊かに伝えています。ドラブル、復活です。谷崎潤一郎、小島信夫が好きなのは、必読。私も早く老人になりたいくなっています。

(二〇一八年冬刊行予定)

『戦時の音楽』

レベッカ・マカーイ

Music for Wartime by Rebecca Makkai

藤井光

text by Fujii Hikaru



第二次世界大戦の東欧で起きた悲劇。21世紀のニューヨークにタイムスリップしてきたパッパ。突如として演技ができなくなったシカゴの舞台俳優。そして、マカーイ家の歴史を彩る言い伝えの数々。リアリズムから寓話、そしてルポルタージュ仕立ての回想まで、レベッカ・マカーイの十七の短編は自在に語り口を変え、そのつど違う世界に読み手を連れていってくれる。

早くから短編の名手として評価を受けながら、マカーイは初短編集である本書の完成に十三年を費やした。戦争と音楽という主題を作家がついに見出したとき、『戦時の音楽』というこの本は、世界のなかで芸術に向かう人々の姿を探求するものとして姿を現した。鋭利な知性とユーモアが同居する物語を旅したあと、読み手の心に、人というものの不可思議さをめぐるさまざまな問いが長く残り続けるだろう。

(二〇一八年春刊行予定)

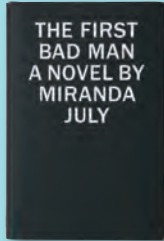
『最初の悪い男』

ミランダ・ジュライ

The First Bad Man by Miranda July

岸本佐知子

text by Kishimoto Sachiko



四十三歳独身のシェリルは、自ら考案した「システム」に基づき徹底的に合理化された快適生活を謳歌している。本は立ったまま読む食事は皿を省略して鍋から直接、等々。職場の年上男に片思いしつつ、運命の赤ん坊クベルコ・ボンディとの再会を夢見る毎日だ。

そんな彼女の益裁的宇宙は、上司の娘が突如転がりこんできたことにより一変する。傍若無人、衛生観念ゼロ、美人で粗暴で巨乳で足の臭い、二十歳のクリーダ。水と油の二人の女の共同生活が臨界点を迎えた時、思いもよらぬ不思議な形の絆が生まれることになる。

初の長編となる本作で、ジュライは「人と人がつながる不思議」へ脳内世界から本物の現実へ」といった、これまでも繰り返し描いてきたテーマを、より深く追究している。次々と現れる予想外の急カーブや断崖に目眩と興奮を覚えつつ、鋭意翻訳中です。

(二〇一八年春刊行予定)

『八つの山』

パオロ・コニエツティ

Le Otto Montagne by Paolo Cognetti

関口英子

Text by Sekiguchi Eiko



勇壮な峰々が連なるイタリアのアルプス。多くの人を惹きつけてやまない美しい自然はしかし、ときに残忍な牙を剥く。そんな山の懷で、内向的な都会の

少年ピエトロと、山から下りたことのない羊飼いの少年ブルーノは、毎年夏を一緒に過ごし、多くの経験をともした。やがて大人になり、それぞれの道を歩み出すものの……。

都会に吸い寄せられ、居場所を求めてさまよう者も、生まれ落ちた場所にしがみつくようにして暮らす者も、同じように人は孤独を抱えて生きていく。そんな現代人たちに、真の友情や父子の関係、自然と人間とのかかわり方などを、泉から湧き出す水のような静謐な文章で語る、密度の濃い小説だ。「子供の頃からずっとこの小説を書いてきた気がする」と語る著者は、本書で「ストレーガ賞」と同賞ヤング部門とのダブル受賞という快挙を成し遂げた。

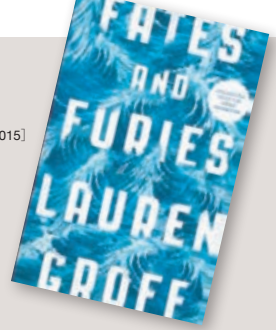
(二〇一八年秋刊行予定)

Coming Soon

photograph © Megan Brown



Lauren Groff,
Fates and Furies[2015]



結婚という名の 壮大なる悲喜劇

ローレン・グロフ

『運命と復讐』

光野多恵子訳 2017年9月刊行予定

オバマ前大統領も愛読、
村上春樹氏も注目する実力派の話題作!

光野多恵子・文
text by Mitsuno Taeko

まだ肌寒いメイン州の砂浜に一組の男女が現れた。駆け落ち同然で結婚したふたりはそこで体を重ね、肉体は永遠に離れそうになかった。裕福な家庭に生まれながら、屈折した青春時代に役者を目指し、苦節の末、戯曲家として成功をおさめるロットと、夫を支える美貌のマチルド。前半は穢れなき妻を愛する夫の視点で綴られるが、後半の妻の視点になると一転、マチルドのスクランダラスな過去が飛び出し、25年におよぶ結婚生活に、全く異なる真相が秘められていたことが明らかになっていく。

著者ローレン・グロフは在学中に発表した短篇が雑誌に掲載されて注目を浴び、そのひとつが村上春樹編訳のアンソロジー『恋しくて』に収録されている。長篇三作目となる本書は、書評誌で軒並み高い評価を受け、全米図書賞の最終候補に。2015年のAmazon年間総合ベストブックにも選ばれ、オバマ前大統領もその年のベス

トに挙げるほどの人気作品となった。

それにしてもなんと熱く、自由な小説だろう。一組の夫婦の幼少期からのストーリーを夫と妻の側から描くことで、結婚生活、あるいは人間関係そのものが、立場によって喜劇にも悲劇にも転ずることを痛感させられる。その語り口もまた独特で、長い年月の出来事を寓話のように圧縮して語り、シェイクスピア劇の要素を取り入れながら詩のように詠い上げ、パーティーでの会話劇を重ねることで、年月の経過や登場人物の心情変化を生き生きと描き出す。それらをぎゅっと一冊にまとめるエネルギーに圧倒され、この破天荒で魅力的な語り口をぜひ日本語にしてみたいと願い、作家のパワーに引き摺られるように翻訳作業に取り組んできた。

次のページでどこに連れて行かれるのか全く予測のつかない、破格の熱量の大河小説をぜひ楽しんでいただきたい。



パリ左岸の
ピアノ工房
T・E・カーハート
村松潔訳

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように再生する名器の数々……。眠っていた音楽とピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

2000円
590027-4



停電の夜に
ジュンバ・ラヒリ
小川高義訳

ろうそくの灯りの下、秘密の話を——。ピュリツァー賞ほか独占! インド系女性作家による驚異のデビュー短篇集。もはや古典的名作。

1900円
590019-9



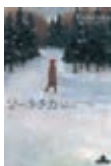
朗読者
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

十五歳の少年ミハエルが経験した切ない初恋。母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは——。衝撃の世界的ベストセラー。

1800円
590018-2

新潮 Crest・ブックスが
世界各地から選りすぐった
87タイトルをご紹介します。
(価格は税別です)

Shincho Crest Books Catalog 1998-2017



ソーネチカ
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

本の虫で、容貌のぼっとしないソーネチカ。最愛の夫の秘密を知ったとき彼女は……。神の恩寵に包まれた女性の静謐な一生の物語。

1600円
590033-5



灰色の輝ける
贈り物
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ、ケープ・ブレトン島の奇麗な自然の中で、漁師、坑夫を生業とし、一族としての思いを胸に生きる人々。奇跡のような名短篇集。

1900円
590032-8



ウォーターランド
グレアム・スウィフト
真野泰訳

土を踏みしめていたはずの足元に、ひたひたと寄せる水の記憶——。プッカー賞作家によるもっとも危険なもっとも愛すべき最高傑作。

2600円
590029-8



その名にちなんで
ジュンバ・ラヒリ
小川高義訳

長く口にせずにきた思い。愛しい人を遠く焦がれる切なさ。名手ラヒリが精緻に描く人生の機微。ふかぶかと胸にしみる待望の初長篇。

2200円
590040-3



冬の犬
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

カナダ東端の島で、犬、馬、驚ら動物とともに、祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。生の厳しさと美しさを混えた八篇。

1900円
590037-3



ジェル・コレクター
アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

孤島で貝を拾い、静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞受賞作を含む鮮やかな全八篇。

1800円
590035-9



彼方なる歌に
耳を澄ませよ
アリスティア・マクラウド
中野恵津子訳

18世紀末、スコットランドからカナダ東端の島に渡った赤毛の男がいた——。カナダの「静かな巨人」が描く、愛すべき一族の物語。

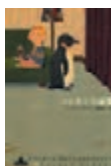
2200円
590045-8



奇跡も語る者が
いなければ
ジョン・マズレガー
真野泰訳

奇跡は起こった。密やかに。誰にも知られないまま。斬新な文体と恐るべき完成度で無名の人々々の生と死を結晶させた現代の聖物語。

2200円
590043-4



ペンギンの憂鬱
アンドレイ・クルコフ
沼野恭子訳

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、身辺に不可解な出来事が次々に起こって……。

2000円
590041-0



世界の果てのビートルズ

ミカエル・ニエミ
岩本正恵訳

笑えるほど最果ての村で、僕は育った。凍てつく川。薄明かりの森。そして手づくりの僕のギター！ スウェーデンの傑作長篇小説。

1900円
590052-6



ある秘密

フィリップ・グランペール
野崎歓訳

孤独な少年の夢想在残酷な過去を掘り起こす。禁断の恋。懊悩。そしてホロコस्त。一九五〇年代のバリを舞台にした自伝的長篇。

1600円
590051-9



素数の音楽

マークス・デュ・ソートイ
富永星訳

神秘的な謎に満ちた数、素数。その不思議な美と今も続く天才たちの挑戦とは。小川洋子さん絶賛のスリリングなノンフィクション！

2400円
590049-6



千年の祈り

イウン・リー
篠森ゆりこ訳

長い祈りに支えられた父娘の縁。人生の黄昏にある男女の情愛……。オコナー賞、ヘミングウェイ賞ほか総なめの驚異のデビュー短篇集。

1900円
590060-1



林檎の木の下で

アリス・マンロー
小竹由美子訳

スコットランドの寒村から新大陸カナダへ……。三世紀の時を貫く作家自身の一族の物語。落ちついた声、天才的な筆捌き。12の自伝的短篇。

2400円
590058-8



イラクサ

アリス・マンロー
小竹由美子訳

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通すまなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、「短篇の女王」による九つの物語。

2400円
590053-3



ペット・サウンズ

ジム・フジャー
村上春樹訳

恋愛への憧れ、父との確執、麻薬、肥満……。ピーチ・ボーイズの最高傑作『ペット・サウンズ』は、壮絶な戦いの記録でもあった。

1600円
590064-9



土曜日

イアン・マキューアン
小山太一訳

ロンドン、午前四時。未明の空に火を噴く飛行機。テロか？ それとも？ 名匠の優美極まる筆致で描かれる、脳外科医の不穏な一日。

2200円
590063-2



海に帰る日

ジョン・バンヴィル
村松潔訳

海に消えた少女の記憶が、今もわたしを翻弄する。荒々しく美しい、あの海のように。アイルランド随一の文章家のブッカー賞受賞作。

1900円
590061-8



記憶に残っていること

アリス・マンロー他
堀江敏幸編

世界最高の短篇小説をこの一冊に。マンロー、トレヴァー、ラヒリ、マクラウド、イウン・リー……創刊から10年間の全短篇集から厳選。

1900円
590070-0



見知らぬ場所

ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

父と母の、子供たちの、恋人たちの歲月。『停電の夜に』以来九年ぶり、世界待望の最新短篇集。フランク・オコナー国際短篇賞受賞！

2300円
590068-7



密会

ウィリアム・トレヴァー
中野恵津子訳

早朝のオフィス、カフェの片隅の定席、離婚した彼女の部屋。秘めた二人の愛の決断とは。「英語圏最高の短篇作家」による十二篇。

1900円
590065-6



通訳ダニエル・シュタイン

上下
リユドミラ・ウリツカヤ
前田和泉訳

ゲシュタポでナチスの通訳をしながらユダヤ人脱走計画を成功させた男。後にカトリック神父となりイスラエルに渡るその激動の生涯。

上2000円
下2200円
590077-9,78-6



最終目的地

ピーター・キャメロン
岩本正恵訳

ウルグアイの邸宅で繰り広げられる愛の物語。英国古典小説の味わいをもつ滑稽でエレガントな傑作長篇。アイヴオリ監督により映画化。

2400円
590075-5



帰郷者

ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

帰郷した兵士が見たものは、なつかしい妻と、その後ろにいる見知らぬ男だった。『朗読者』の著者が積年の思いを注ぎ込んだ傑作長篇。

2200円
590072-4



サラの鍵

タチアナ・ド・ロネ
高見浩訳

パリの女性記者と、ナチに連行された少女。六十年の時を越え、二つの人生が交錯する——累計三百万部のベストセラー。映画化原作。

2300円
590083-0

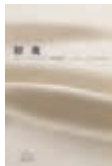


シンメトリーの地図帳

マーカス・デュー・ソートイ
富永星訳

数学史上の知られざる偉業「シンメトリーの地図帳」完成とは。天才たちの息遣いとともに描かれる、美しい数学ノンフィクション。

2500円
590081-6



初夜

イアン・マキューアン
村松潔訳

ずっと二人で歩いていけたかもしれない。あの夜の出来事さえなければ。遠い日の愛の記憶を克明かつ繊細に描く、異色の恋愛小説。

1700円
590079-3



黙禱の時間

ジークフリート・レンツ
松永美穂訳

ギムナジウムで開かれた追悼式。遺影を見つめる少年に甦る、美しい教師とのひと夏の思い出。巨匠による、海に彩られた純愛小説。

1600円
590086-1



いちばんここに似合う人

ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

孤独な魂たちが東の間放つ生の火花を、切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。

1900円
590085-4



奪い尽くされ、焼き尽くされ

ウェルズ・タワー
藤井光訳

夏休みを過ごす少女から、暴虐を尽くすヴァイキングまで。多彩な声と視点で荒涼たる日常を浮き彫りにする、恐るべき短編集。

1900円
590084-7



週末

ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

テロリストが二十年ぶりに出所した週末。旧友たちの胸に甦る、恋、確執、未来への祈り。『朗読者』の著者が描くもう一つの「戦争」。

1900円
590090-8



オスカー・ワオの短く凄まじい人生

ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

オタク青年オスカーの悲恋の陰には、一族が背負った呪いがあった。全米批評家協会賞・ブクリッター賞をダブル受賞した傑作長篇。

2400円
590089-2



小説のように

アリス・マンロー
小竹由美子訳

夫を子連れに奪われた音楽教師。今は幸福に暮らす彼女の前に過去を思わせる小説が現れて——。「短篇の女王」による十の物語。

2400円
590088-5

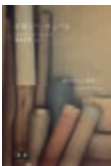


ロスト・シティ・レディオ

ダニエル・アラロン
藤井光訳

ある朝ラジオ局を訪れた少年の手には、無数の行方不明者たちのリストが握られていた。ヘルー系アメリカ人作家によるデビュー長篇。

2100円
590093-9



メモリー・ウォール

アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

記憶再生装置を手に入れた認知症の老女。ダムに沈む山村の人々。戦地でツルに出会う米兵。記憶をめぐる静謐で雄大な六つの物語。

2000円
590092-2



ソーラー

イアン・マキューアン
村松潔訳

太陽光発電でひと儲けを企む狡猾で好色なノーベル賞科学者。だが懲りない彼の人生にも暗雲が——。現代社会を笑いのめす最新長篇。

2300円
590091-5



タイガーズ・ワイフ

テア・オブレイト
藤井光訳

「不死身の男」と「トラの嫁」。二つの物語が、祖父の人生の謎を浮き彫りにする——。本屋大賞翻訳小説部門第一位。驚異のデビュー作。

2200円
590096-0



女が嘘をつくとき

リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

夏の別荘で、波瀾万丈の生い立ちを語るアイリーン。ところがその話はほとんど嘘で……。嘘をつく女たちの哀しくも微笑ましい人生。

1800円
590095-3



残念な日々

デIMITリ・フルフルスト
長山さき訳

貧しく、下品で、誇り高い。のんだくれの父一族との少年時代。心をつかんで離さない、ベルギーの俊英による自伝的連作短篇集！

1900円
590094-6



終わりの感覚

ジュリアン・バーナズ
土屋政雄訳

1700円
590099-1

精緻、深遠、洗練。四度目の候補にしてブッカー賞受賞。英国を代表する作家の、時間と記憶をめぐる優美でサスペンスフルな中篇。



祖母の手帖

ミレーナ・アグス
中嶋浩郎訳

1600円
590098-4

サルデーニャの祖母が愛した「帰還兵」。イタリアの新鋭による、ひたむきで官能的な愛の物語。美しい器楽曲を思わせる小さな本。



手紙

ミハイル・シーシキン
奈倉有里訳

2400円
590097-7

戦争に行った若者と残された少女。ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。



イースタリーのエレジー

ペテニア・ガツパ
小川高義訳

1900円
590102-8

繊細な情感。とほけた味わい。さまざまな階層のジンバブエの人々の日常をモザイクしながらに描きだした類まれなデビュー短篇集。



アンネ・フランクについて語るときに僕たちの語ること

ネイサン・イングラダー
小竹由美子訳

1900円
590101-1

コミカルな語りに深い倫理性。人間の普遍を描きだす啓示のような物語。フランク・オコナー国際短篇賞受賞作。



夏の嘘

ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

2000円
590100-4

避暑地で出会った男女。癌を患う大学教授。作家とその夫。小さな嘘をきっかけに秘められた思いが溢れ出す。著者十年ぶりの短篇集。



いにしへの光

ジョン・バンヴィル
村松潔訳

2100円
590105-9

姿を消した人気女優と後を追う老俳優の、奇妙な逃避行。いくつかの曖昧な記憶が不意に新しい像を結ぶ。ブッカー賞作家の最新作。



美しい子ども

ジュンパ・ラヒリ他
松家仁之編

1900円
590104-2

シリーズ創刊15周年を記念して、全101篇から選んだ傑作短篇アンソロジー。ラヒリ、ミランダ・ジュライ、マンロー、シュリンクほか。



こうしてお前は彼女にフラれる

ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

1900円
590103-5

どうしていつも、うまくいかないのか？ 浮気男ユニオールとたくさんの女たちが繰り広げる、おかしくも切ない九つの愛の物語。

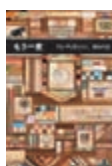


遁走状態

ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳

2100円
590108-0

前妻と前々妻に迫られる元夫。勝手に喋る舌を止められない男。明晰に語られる十九の悪夢。ホラーも純文学も超える驚異の短篇集。



もう一度

トム・マッカーシー
榎木玲子訳

2100円
590107-3

謎の事故で記憶を失い、巨額の示談金を得た男。失われた自分は、莫大な金で取り戻せるのか？ 絶賛と論争を呼んだ痛快な異色作。



ディア・ライフ

アリス・マンロー
小竹由美子訳

2300円
590106-6

2013年ノーベル文学賞を受賞した短篇小説家が、透徹した眼差しと眩いほどの名人技で描きだす平凡な人々の途方もない人生の深淵。



低地

ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

2500円
590110-3

インド民主化運動のなか殺された弟。その身重の妻をアメリカに連れ帰った兄。愛と失意が織り成す波乱の家族史。待望の長篇小説。



ハイウェイとゴミ溜め

ジュノ・ディアス
江口研一訳

1900円
590004-5

『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』の著者による伝説的デビュー作。全米最優秀短篇に選出された「イスラエル」ほか全十篇。



大いなる不満

セス・フリード
藤井光訳

1800円
590109-7

なぜか毎年繰り返される、死者続出のピクニック。平均寿命一億分の四秒の微小生物。不条理と笑いに満ちた圧倒的デビュー短篇集。



**マリアが
語り遺したこと**
コルム・トピン
榎木伸明訳

母マリアによるもう一つのイエス伝。「聖母」ではなく人の子の母としてのマリアが語る、美しく果敢な独白小説。ブッカー賞候補作。

1600円
590113-4



光の子供
エリック・フォトリノ
吉田洋之訳

私の母は誰なのか——。パリを舞台に、映画と現実を往来するある男の愛の彷徨。ル・モンド紙元編集長による《フェミナ賞受賞作》。

1800円
590112-7



甘美なる作戦
イアン・マキューアン
村松潔訳

MI5の美人スパイと若き小説家。二人の愛は幻だったのか？ 自伝的で小説論的。ブッカー賞作家による野心あふれる恋愛小説。

2300円
590111-0



**突然
ノックの音が**
エトガル・ケレット
母袋夏生訳

しゃべる金魚。神様の木音。ままならぬセックス。そして突然のテロ——。イスラエルの人気作家の掌篇集。オコナー賞最終候補作。

1900円
590115-5



風の丘
カルミネ・アマーテ
関口英子訳

古代遺跡の夢。ファッションと目の戦い。一族の秘密。イタリア最南端、風の強い丘に暮らす家族四代の物語。カンビエロ賞受賞。

2100円
590115-8



善き女の愛
アリス・マンロー
小竹由美子訳

誰にも覚えのある家族間の出来事を見事なドラマとして描きだす、マンローの金字塔の短篇集。1998年度全米批評家協会賞受賞作。

2400円
590114-1



**あなたを
選んでくれるもの**
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

映画の脚本執筆に行き詰まった著者は、フリーペーパーに売買広告を出す人々を訪ねる。カラー写真満載、心を打つインタビュー集。

2300円
590119-6



子供時代
リュドミラ・ウリツカヤ
絵ウラジーミル・リュバフ
沼野恭子訳

中庭のあるアパートに住む子供たちが出会った奇跡。「キャベツの奇跡」「折り紙の勝利」等、祝福されたかけがえのない瞬間に心打たれる6篇。

1800円
590118-9



**ヴォルテール、
ただいま参上!**

ハンス=ヨアヒム・シュートリヒ 松永美穂訳
尊敬と反発、女性関係に金銭トラブル。ヴォルテールとフリードリヒ大王の知られざる素顔を描く、笑いと驚きの新しい歴史小説。

1600円
590117-2



未成年
イアン・マキューアン
村松潔訳

輸血を拒む少年と彼を救おうとする女性裁判官。運命や信仰をめぐる激しい葛藤、恋にも似た思い。ブッカー賞作家による最新長篇。

1900円
590122-6



文学会議
セサル・アイラ
柳原孝敦訳

小説家でマッド・サイエンティストの〈私〉は文学会議に出席する文豪のクローン作製を企むが、アルゼンチンの奇才が放つ衝撃作!

1700円
590121-9



べつの言葉で
ジュンバ・ラリ
中嶋浩郎訳

「私にとってイタリア語は救いだつた」——夫と息子たちとともにローマに移住した作家が綴ったイタリア語による初エッセイ。

1600円
590120-2



**屋根裏の
仏さま**
ジュリー・オオツカ
岩本正恵・小竹由美子訳

20世紀初頭、「写真花嫁」としてアメリカに渡った少女たち。そのささやきが圧倒的な声になって立ち上がる全米図書賞候補作。

1700円
590125-7



陽気なお葬式
リュドミラ・ウリツカヤ
奈倉有里訳

自分のお葬式が愛で満たされるように願う亡命ロシア人画家アーリーの最期の贈り物とは——不思議な視察感と幸福感が溢れる物語。

1800円
590124-0



**夜、僕らは
輪になって歩く**
ダニエル・アラルソン
藤井光訳

内戦終結後に再結成された伝説的小劇団。十数年ぶりの公演旅行は、ある嘘をきっかけに思わぬ方向へ。ペルー系作家による話題作。

2200円
590123-3



**誰もいない
ホテルで**
ペーター・シュタム
松永美穂訳

森の中の宿で。リノベーションされた工場跡地で。音楽フェスの夜に。心をとらえ、運命を動かす瞬間。スイス人作家による短篇集。

1700円
590128-8



煉瓦を運ぶ
アレクサンダー・
マクラウド
小竹由美子訳

その後の人生を一変させる決定的瞬間を、瑞々しい筆致で描き出す。故アリスティア・マクラウドの息子による鮮烈なデビュー短篇集。

1900円
590127-1



**あの素晴らしき
七年**
エトガル・ケレット
秋元孝文訳

愛しい息子の誕生からホロコスタを生き延びた父の死までの、悲嘆と哄笑と祈りに満ちた七年。イスラエル作家の自伝的エッセイ集。

1700円
590126-4



ジュリエット
アリス・マンロー
小竹由美子訳

母と娘、そのまた娘。届かない互いの思いを諦観とともに描くアルモドバル監督映画化の連作など、ビターなマンロー全開の傑作短篇集。

2400円
590131-8



四人の交差点
トンミ・キンスネン
古市真由美訳

異なる時代を生きた四人の喜びと痛みの記憶が、やがて一つの像を結ぶ。フィンランドで記録的ベストセラーとなった、ある家族の物語。

2200円
590130-1



**すべての
見えない光**
アンソニー・ドーア
藤井光訳

ドイツの若い技術兵と、フランスの盲目の少女の心を繋いだのは、ラジオから流れる懐かしい声だった——。ピューリッツアー賞受賞作。

2700円
590129-5



**ビリー・リンの
永遠の一日**
ベン・ファウンテン
上岡伸雄訳

イラクから帰還し、戦意高揚のショーに駆り出された兵士。過酷な戦場と愚かな狂騒の、途方もない隔絶。全米批評家協会賞受賞作。

2300円
590134-9



本を読むひと
アリス・フェルネ
デュランテクスト 凧子訳

パリ郊外の荒地に暮らす文字を知らないジプシーの大家族と、彼らに本を読む喜びををもたらした図書館員。フランスのロングセラー！

1900円
590133-2



ウインドアイ
ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳

妹はどこへ消えたのか。それとも、妹などいなかったのか？ 滑稽でいてひどく切実な、不安と恐怖。『遁走状態』に続く待望の短篇集。

2000円
590132-5



五月の雪
クセニヤ・メルニク
小川高義訳

仄暗い歴史を背負う極寒の町マガダン。この土地で暮らす人々の哀しみと喜び。米国注目のロシア系移民作家による、鮮烈な連作短篇集。

2000円
590137-0



人生の段階
ジュリアン・バーンズ
土屋政雄訳

悲しみの回帰線を超えて——誰かの死は、その存在が消えることまでは意味しない。公私ともに最高の伴侶を亡くした作家の思索と回想。

1600円
590136-3



**ふたつの海の
あいだで**
カルミネ・アバーテ
関口英子訳

ある日、姿を消した祖父。《いちじくの館》再建の夢はいかに——。イタリアの人気作家が描く、土地に深く根ざした強靱な物語。

1900円
590135-6



**おじいさんに
聞いた話**
トーン・テレヘン
長山さき訳

ハッピーエンドのお話はないの？ ロシア生れの祖父が語る悲哀に満ちた人生の物語。『ハリネズミの願い』の作家による愛すべき掌篇小说集。

1800円
590140-0

【最新刊】



オープン・シティ
テジュ・コール
小磯洋光訳

マンハッタンを日ごと彷徨する若き精神科医。時折よみがえる遠い国の記憶。数々の賞に輝いたナイジェリア系作家によるデビュー長篇。

1900円
590138-7



階段を下りる女
ベルンハルト・シュリック
松永美穂訳

名画とともに異国に消えた謎の女。消そうとして消せなかった彼女の過去とは？ 一枚の絵をめぐるドイツのベストセラー作家の新境地。

1900円
590139-4